

寝過ごし、懐かしい思い出

「気がつけばもう師走も中旬・・・」、という書き出しで、今朝（12月12日付）の天声人語は始まっている。今週、来週と忘年会が続き、飲んで騒いで終電に乗り、目が覚めると見知らぬ遠方の駅——。そんな「寝過ごし」は避けたいものだと続く。

「寝過ごし」とインプットされて、真っ先に思い出すのは、谷川岳からの帰路のことである。昭和38年に入会した昭和山岳会の修行の段階は、入会した初年度の4月に新人歓迎会があり、5月にカモシカ山行と称するトレーニングがある。これは青梅線御岳駅を夜の〆時にスタート、大岳山、御前山、三頭山といわゆる奥多摩三山を結び、笹尾根を下って生藤山を越え、和田峠から陣馬山に登り返し、影信山、城山、高尾山と歩いて中央線高尾駅まで歩き通した。約70km、高尾駅到着は翌日の夜の10時になっていた。

6月に丹沢大倉尾根を塔ノ岳まで30kgのキスリングを背負って登るボッカ訓練があり、8月に新人の夏山縦走合宿があった。11月下旬に富士山で雪上訓練があり、年末年始の冬山合宿が明けると、2月、初めての岩登り訓練が鷹取山であった。2年会員になると自分たちで誘い合って沢登りをしてこいとおっぼり出された。

表丹沢水無川流域の沢登りからスタート、夏前には西丹沢の同角沢やザンザ洞、箱根屋沢、悪沢など登った。夏山合宿は南ア・赤石岳集中合宿で、ぼくは赤石沢北沢を登った。秋になると沢筋の雪が消えて、谷川岳南面の沢登りと東面マチガ沢流域が解禁になった。ヒツゴー沢、オジカ沢、鷹ノ巣A沢、C沢、川棚沢を登り、赤谷川本谷も登り、マチガ沢シンセン沢左俣、沖ノ耳東南稜を攀じた。それらの経験をふまえて、3年目の夏、一ノ倉沢、幽ノ沢の岩場が解禁になった。

当時は交通事情も悪く、登高に時間を費やすと両夜行を強いられることも珍しくなかった。そんな時は谷川温泉の露天風呂に入って時間を潰していた。夜行列車は上野駅に朝5時前に到着したと思う。ぼくは横浜に住んでいたのも、桜木町が終点だった京浜東北線の電車を利用していた。

その朝も桜木町行きに乗る。シートに腰を落とすとすぐに寝入った。あっ寝過ごしちゃいけないと思って目を覚ます。どこかのホームに滑り込んだところで、看板に「浜松町」とあったので、なあんだまだ浜松町かと安心し、もうひと眠りしようと思った次の瞬間びっくりした。電車は上野に向かって走っているのではないか。わがことながら大笑い。今朝の天声人語は、懐かしい「寝過ごし」を思い出させてくれた。

最終の中央線で寝過ごし、終点の高尾駅で途方に暮れている酔っ払い救済のため、西東京バスでは12月の金曜日に限って、高尾駅から八王子駅まで臨時バスを1便走らせる。「終電で寝過ごし、寒天を仰ぐのもまた相当につらい。くれぐれもご用心を」。天声人語はそう結んであった。